









都会の喧騒から離れた、秘境の温泉宿。

少々値は張るものの、それに見合う以上のもてなしを提供してくれる。源泉かけ流しの温泉や、地元の新鮮な海の幸が堪能できる上、客室は畳敷きで広縁のある和室で、趣を感じさせてくれる。

そんな情緒ある世界の一角に、吐息交じりの2人分の声が静かに響いていた。

「あつ……ま、まって……レン……」

「何？」

レンの唇がリンの頬を、首筋を、胸元を襲い続ける。リンの身体はレンの腕の中にぎゅっと囚われており、とても抜け出せそうにない。この愛しくも淫らな獣をどうにか落ち着かせようと、リンは非難の声をあげた。

「こ、こういうつもりじゃ……レンのえっち……」

「女子部屋を1人で抜け出して俺の部屋に来たって何言

つてんの」

「う……」

リンの密かな思惑など、同じ時を共有し続けてきた片割れには筒抜けだった。痛いところを突かれたリンに、レンの追撃は続いていく。

「リンが嫌なら止めるけど」

「レン、ずるい……」

そんなことを言われてしまえば、もう手立てが無かった。思わず涙目になってしまったリンに、レンは愛おしい瞳といたずらっぽい笑みを向けた。

「悪い悪い。ほら、こっち向いて……」

涙で潤んだ蒼い瞳が揺らいで、希うようにレンを見つめる。

2人の距離がゆっくりと近づいていき――

コンコンッ！

その時、甘い空気を割るかのように、部屋の扉をノックする音が響いた。バツと2人の距離が離れ、音のした方を同時に振り返る。

「リンちゃん、もしかしてこっちにいる？温泉行こー！」

「進捗どうなんだ？」

向かいに座っているレンに冷たく睨まれ、リンは肩をすくめた。

「進捗だめです」

その返答を聞いたレンの表情が、一瞬にして険しくなる。「やれ。今からやれ。今後作業を發したら許さない」

「許して！ 描く！ 描きますから！」

「……」

無駄口を叩くな――言っではないが顔がそう言っている。そんなレンの視線はリンの手元に刺さっている。そこには、さつきとりあえず鉛筆を握ったリンの手、そして真っ白な紙がある。これは……監視だ。

今リンがこの紙に描こうとしているのは、修学旅行のしおりの表紙だ。上にタイトルが入るから、その下の正方形に収まる形で絵を描けとレンに言われている。

学級委員であるレンは修学旅行のしおりの作成を主導

する担当で、リンに表紙の絵を頼んできた。それで今こうして、誰もいなくなった教室に残り、机を向かい合わせにして二人でしおりの作成をしている。レンの机の上には借りてきた授業用のノートパソコンが置かれていて、さつきまでレンは無言でキーボードを叩いていた。そして、リンの手が特に動いていないことに気づいて進捗を聞いてきた……というわけだ。

「そういうレンはどうなの。レンも手が止まったじゃん」

「ちゃんと書いてんだよ。ほら」

レンがパソコンを回転させて画面を見せてくる。確かに、見開き二ページ分の文章が一通り書かれている。

「……」

口の出しようもない。リンはうつむいて、握った鉛筆の先を紙の上に乗せた。適当に紙の上で鉛筆をすべらせ、それとなく描く動作はしてみるが、なんの目的もない線が白紙の上が増えるだけだ。レンは自分の方にパソコンの画面を向け直して作業を再開しているのに、リンは全く集中できずにいる。

「ねえレン、修学旅行のしおりってもっとページ分担任して







